

高き志【こころざし】

あれから10年…

明日3月11日は、東日本大震災から10年を迎える日です。2020年12月時点での、この震災での死者は15,899人、行方不明者が2,527人と発表されています。この震災が原因で起きた福島第一原子力発電所の事故も含め、戦後の日本が経験した最大の災害となってしまいました。

震災後の報道や出版物等で、多くの死者・行方不明者一人一人に家族があり、日常営んでいた生活があり、直面した災害に必死に立ち向かった現実があったことを再認識する機会が多くありました。

遠藤未希さん(24)もその中の一人です。防災対策庁舎から最後まで住民に避難を呼びかけた後に亡くなった女性と言え、お分かりいただけるかと思えます。宮城県南三陸町の危機管理課職員であった遠藤未希さんは防災対策庁舎の2階にある放送室から「大津波警報が発令されました。高台に避難してください。」「6メートルの津波が予想されます。」「異常な潮の引き方です。逃げてください。」等の放送を30分も続けたそうです。しかし、その頃、津波は庁舎に迫りつつあったのです。遠藤さんたちは、上司の指示で屋上へ避難しました。しかし、津波の後、屋上で生存が確認された10人の中に遠藤さんはいなかったのです。

南三陸町の住民約17,700人のうち、半数近くが避難して助かりました。遠藤さんは、強い責任感で果たすべき職責を全うしたといえるでしょう。

佐藤愛梨ちゃん(6)もその中の一人となっていました。高台の幼稚園を出発した送迎バスが、海沿いを走ったために津波にのまれ亡くなった園児の中の一人と言え、お分かりいただけるかと思えます。地震の後、宮城県石巻市の日和幼稚園を12人の園児を乗せて出発した送迎バスは、7人の園児を自宅等へと送った後、津波の危険を感じ園に引き返す途中で、その津波に襲われてしまったのです。佐藤愛梨ちゃんは、車内で怖がる友達に「大丈夫、怖くないよ。」と声をかけ、歌で励ましていたと言います。歌っていた歌は「♪ありがとぅって伝えたくてー♪」この歌は、4日後に控えた卒園式で歌おうと、愛梨ちゃんがお母さんと毎日練習していた歌だったそうです。(先に降りて助かった園児の後日証言より)

愛梨ちゃんのことは絵本になっています。題名は「あなたをママと呼びたくて…天から舞い降りた命」お母さんは「人を思いやる心や命の尊さを、愛梨が身をもって教えてくれた。」とされています。

話は少し変わりますが、「風の電話」をご存知でしょうか。岩手県大槌町の丘の上にある白い電話ボックスの中にある電話です。震災後、震災でなくなった人と話をするために多くの人々が訪れるようになった電話です。もちろん本当に会話ができません。電話線もつながっていません。しかし、多くの方が訪れずにはいられない場所なのです。大切な人を突如失った方がどのような気持ちで電話ボックスに入り、受話器を持ち、どんな話をされるのか想像しただけで目頭が熱くなってしまう。上に書いた二人のご家族も受話器を持たれたのかもしれませんが。最初にも触れましたが、多くの死者・行方不明者一人一人に家族があり、日常営んでいた生活があり、直面した災害に必死に立ち向かった姿があり、家族と話したいことがまだまだたくさんあり、大きな希望・明るい未来があったのです。

誰も望んで死んだ人はいないだろう。もつともつとなんとかして生きてきたはずだ。だから最期のさいごまで生きる努力をしたのだろう。しかし、叶わないと知ったとき家族の無事を祈って逝ったと思う。また、残された家族も最期に一言、言葉をかけてやりたかったはずだ。しかし、その願いも叶わず一人旅立たせてしまった。それらのお互いの想いを線につながっていない電話を通して、風に乘せて伝えあっている。【「風の電話」 佐々木格著 より抜粋】

抜粋した著書「風の電話」には、設置した佐々木さんの想いや多くのエピソードが書かれています。「この機会に」と思い、読み始めたところ引き込まれるように一気に読んでしまいました。

震災から10年。「風の電話」を読みながら、自分にできることは、これらのことを胸に刻み、誰かのために一日一日を大切に生きることしかないのだと感じていました。